

07 ウルビーノ (イタリア)

ルネサンスの「現実」を想う



●ルネサンスの提供者

ウルビーノはルネサンスの街である。街の多くがルネサンス期につくられ、そしてその後変わっていない*1。

ルネサンス期に形成された街の主要部分は、領主の館であるパラッツォ・ドゥカーレとその周辺である。この建物は街全体のなかでずば抜けて大きく目立つ建物で、平面的にも立面的にもこの街の焦点となっている。このパラッツォ・ドゥカーレをつくった領主はフェデリーコ・ダ・モンテフェルトロ。フェデリーコは1444年から82年まで38年間ウルビーノ公の座にあった。彼は「自分の都市に長期間にわたる一連の工事を続けて真に改造するのに必要な時間と方法をもった唯一人のルネサンス君主であった」*2と言われる。

フィレンツェのウフィツィ美術館には『ウルビーノ公夫妻の肖像』と題された、男女の横顔を描いた一对の肖像画がある。この男性がフェデリーコで、鼻の上の目のあたりが欠き取られたように凹んでいる。彼は馬上槍試合で右目を失明してしまったという。特徴ある鼻はこの傷跡なのだ。背景にはウルビーノのあるイタリア中部・マルケ地方に似た景観が描かれている。画家はピエロ・デッラ・フランチェスカ(1411?-92)。ルネサンス期の画家のなかでも、精緻な透視図法と均整の取れた幾何学的構図を駆使した点で頂点に立つ画家である。ピエロは『絵画の遠近法について』という

理論書をフェデリーコに献上している。芸術家と庇護者とのよき関係を物語る事実である。

●歴史に学ぶ「考え方」・新しい「風景」

ピエロ・デッラ・フランチェスカの生きた15世紀イタリア、絵画の表現は劇的に変わる。人物も建物も自然もすべて写真のように描かれるようになる。遠近法によるためである。遠近法開発後、人々の目は「現実」を遠近法のなかで見えるようになった。それ以前のゴシック期の絵を見るとよい。人物の大きさはまちまちで、たいてい背景はない。それが遠近法以前の人々の「現実」だったのだ。ゴシック期にももちろん景観はあった。しかし、それを人々は見ていなかったのである。つまり「風景」として見なさなかった。遠近法という見方を得たことで、人々は自然も建物も人物もすべての景観を「風景」として見るできるようになったのである。それは世界を変える「考え方」であった。そしてそのことを示したのが芸術家たちだったのだ。けだし、芸術の役割は新しい「風景」を示すことである、とすることができる。

では新しい「考え方」はどこからきたのか。ルネサンス期の遠近法はブルネレスキに端を発する。フィリッポ・ブルネレスキ(1377-1446)はフィレンツェの大聖堂(サンタ・マリア・デル・フィオーレ)のクーポラを設計し、ルネサンスの幕を開けた。彼は古代ローマの遺跡を観察することから巨

大なクーポラの架構法を考案したと言われる。設計をするということは、計画の全体像を予め決めておくことである。そのためにも全体が比例体系によって構成される古代ローマのプロポーションや、

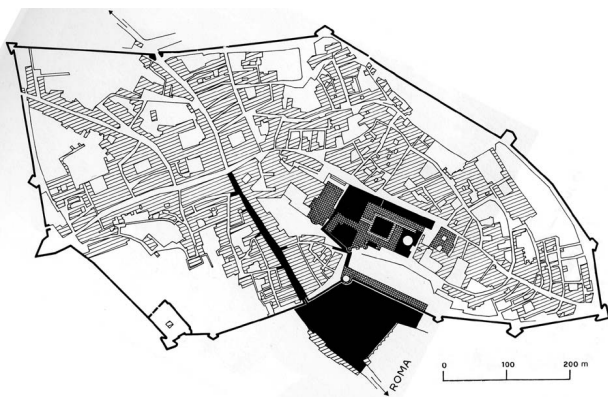


図1 ウルビーノの地図 整備された外部空間(黒地)とパラッツォ・ドゥカーレ(網地)(文献①)



図2 フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロの肖像 鼻に特徴のある横顔(文献②)

*1 イタリアの建築史家、レオナルド・ベネーヴォロはルネサンス期に形成された代表的な小都市としてピエンツァとウルビーノを挙げている。

*2 文献① p.45

*3 すなわち「再生」とは古代の再生を示す。ルネサンス期において理想とされた人物や建物のプロポーションは古代ローマのそれであった。これがヨーロッパの芸術や建築で言われる「クラシック=古典」となる。ついでに言えば「中世」とは古代と再生の中間に位置する時代であり、こうした様式史は本質的に古典主義的である。

*4 文献③ p.15

*5 大学は1506年の創立だが1882年にモンテフェルトロ家の館に移転し、現在の場所となった(文献⑤)。1960年代からジャン・カルロ・デ・カルロの設計によって、かつて僧院や孤児院として使われていた建築が用途変更された。歴史的コンテクストを重視し、外観からはほとんど

平面図と立面図から幾何学的に完成を予想できる遠近法は有効であった。そしてこの仕事の仕方から、彼は設計者としての建築家という職能を打ち立てた。ブルネレスキは設計の過程のなかで古代をヒントとし、そこから新たな技法を開発したのだが、こうした古代復活の傾向を、後代の学者が「ルネサンス=再生」と呼んだのであった*3。

新しい「考え方」によって「風景」が見えてくること、しかもその「考え方」はもしかすると歴史のなかに潜んでいるかもしれないこと。ルネサンスとはそうした期待を含んだ言葉である。

●「世界」を生んだ小都市

フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロはウルビーノのパラッツォ・ドゥカーレと街の造営を30年以上にわたって続けた。中世の部分に手を加えながら、徐々に各部の比例と景観が整えられ、ルネサンスの理想とする街並が形成されていった。この造営に建築家として参加したのはルチアーノ・ラウラーナとフランチェスコ・ディ・ジョルジオ・マルティーニだと言われている。

パラッツォ・ドゥカーレは、きわめて均整の取れた古典的な中庭を中心にして各棟が配置され、非常に大きな建物であるにもかかわらず、威圧的になることなく街並に参加している。この建物群は敷地の高低差のために、街の外に対してと内に対しての2つのスケールの異なる顔を持っている。



図3 パラッツォ・ドゥカーレ 街の外に向けてのファサード 2本の尖塔が忘れがたい印象を残す

ど手を加えたことを意識させないリノベーションは、現在の目から見て非常に重要かつ先駆的な設計と考えられる。

*6 文献① p.58

●参考文献

①レオナルド・ベネーヴォロ、佐野敬彦・林寛治訳『図説・都市の世界史3』相模書房,1983

②『世界美術大全集 第11巻 イタリア・ルネサンス1』小学館,1992

③ジュリオ・カルロ・アルガン、堀池秀人・中村研一訳『ルネサンス都市』井上書院,1983

④マネッティ、浅井朋子訳『ブルネレスキ伝』

⑤『イタリア旅行協会公式ガイド3 フィレンツェ/イタリア中部』NTT出版,1995

外に対しては2本の尖塔の間に3層のバルコニーを持つ、高く大きいファサードを現し、一方、街の内に対しては前面の建物を整備することで、道が消点に向かって伸びる遠近法的な街路をつくりだした。外に対しては街を司るシンボルを、内に対しては理想都市の景観を提供したのである。イタリアの建築史家は「貴重なものがいっぱいあった、鎧でおおわれた宝石箱」*4と表現している。

フェデリーコはパラッツォ・ドゥカーレの造営にあわせて、当代気鋭の建築家、芸術家、科学者、人文学者たちを呼び集めた。図書館と大学*5がつくられ、小都市ウルビーノは文化・芸術の発信地となった。そしてこの文化的風土のなかから次世代の巨人が生まれた。ドナート・ブラマンテ(1444?-1514)とラファエロ・サンツィオ(1483-1520)である。彼らは幼少のころから、ウルビーノにいた芸術家や文化人からその技法と哲学を学んだ。

「ウルビーノの工房にはイタリア唯一の専門家の一団が形成され、フェデリーコの死後、彼らは大都市一ヴェネツィア、ミラノ、ローマから招かれ次の世紀の新しい国際文化の形成に貢献したのであった。」*6

こうしてブラマンテは建築家としてローマでサン・ピエトロ大聖堂の原案をつくり、ラファエロは「神のごとき」と称えられるルネサンス絵画の典型を成したのであった。ウルビーノの文化が世界を大きく変えていったのである。



図4 街の内側のパラッツォ・ドゥカーレ前の街路 両側の建物の軒線が遠近法的な消失点をつくる